



②⑥ 素朴な偉人の足跡

オンライン追悼会

2020年12月20日に、ハーバード大学の名誉教授、エズラ・ヴォーゲル先生が急逝された。日本では『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の作者として知られた。享年90歳。

年明けて1月10日、ハーバード大学に集う中国系の学者たちが主催する自主勉強会、「大学サロン」の開く追悼会に参加した。先生が生前、応援していた組織のひとつだ。追悼会は先生のご夫人やハーバード大学の関係者、さらには中国本土や香港、そして日本からの発言者を得てZoom上で開催し、YouTubeでもライブ配信した。主言語は中国語。参加者は450人。大陸から聞いていた人が多かったせいか、4時間に2度の攻撃？を受けて接続が落ちたが、多くの聴衆がすぐに再アクセスしてくれた。

私はヴォーゲル先生の元研究助手だ。先生の最後の本2冊を和訳し、過去16年間に大量のメールを交わしてきたので、先生のごことはよく知ったつもりでいた。しかし、この追悼会に出て改めて先生の「特別さ」がよくわかった。ヴォーゲル先生は実は、日本語だけでなく中国語も堪能で、中国では「偉大な中国研究者」として知られる。中国の知識人たちの彼への敬愛ぶりは尋常ではない。

なぜ特別なのか

彼らによると、“傅高義”（ヴォーゲル教授の中国名）

は他のアメリカ人と全く違うのだという。アメリカの多くの学者は、中国人に会うとアメリカ人の見解を英語でレクチャーしようとする。自分たちの方が上だという立場を決して崩さない。しかし、“傅高義”の特徴は「どんな人にも教えを請う」謙虚な姿勢だった。

彼は中国人を尊重し、中国語で語りかけてその言葉に耳を傾け、中国のロジックを踏まえてその社会を総合的に理解しようとした。加えて中国社会を、そして中国の世界との関係をよりよくしていくために、自分の時間を徹底的に犠牲にして人材育成や制度構築に励んでくれた。ハーバード大の偉大な学者でありながら、いつも素朴な一般人として振る舞い、普通の中国人の気持ちに寄り添うことを決して忘れなかった。

追悼会には名の知れたアメリカの中国研究者が何人か参加していた。だが中国人たちはその前で、「傅高義にとって代われるアメリカ人は見当たらない」と断言していた。米中関係が不安定化し、両国で相手国への猜疑心が渦巻く現在、彼らにとってそれほど、 “傅高義” を失った打撃が大きかったということだろう。

追悼会には名の知れたアメリカの中国研究者が何人か参加していた。だが中国人たちはその前で、「傅高義にとって代われるアメリカ人は見当たらない」と断言していた。米中関係が不安定化し、両国で相手国への猜疑心が渦巻く現在、彼らにとってそれほど、 “傅高義” を失った打撃が大きかったということだろう。

学者の役割とは

温厚かつ明るい人柄で知られたヴォーゲル先生だ

が、私の印象では彼はとても自分に厳しかった。2013年に『現代中国の父 鄧小平』の和訳本が出版され、日本各地を講演して回る前、彼は3カ月間、毎日2時間、日本語を再特訓した。中国の研究に没頭して日本語が下手になったから、というのだ。当時83歳。望めば同時通訳を使うこともできるのに、日本人に日本語でメッセージを伝えることにあくまでこだわった。それが一番、人々の心に響くから、と。

彼は学者という仕事に特別な責任と使命感を感じていた。私は一度だけ彼に怒られたことがある。所属大学でどんな授業を教えているのかと聞かれ、学生にプレゼンの方法やパワポの作り方を教えています、中国に関することは教えていません、と答えたのだ。

これは彼をひどく失望させた。この時だけは「日本は中国の隣国だ。日本人には正しい中国理解が不可欠だし、あなたにはそれを導く能力がある。なのにどうしてその能力を発揮しないのだ」と真剣に糾弾された。なぜなら彼自身が、日本や中国のことをアメリカ人に正しく理解させるために人生を捧げてきたのだ。彼は、学者は社会を良くするために働くべきだと信じていたし、それを実行してもいた。

習近平氏によれば、国際社会ではいま「この百年に見られなかった大変動」が起きているという。学者はこのような時こそ、国境を超えて人々の心をつなぎ、国家間の利害関係の再構築を担っていくべきではないか。日米中の後輩たちに重い宿題を残し、ヴォーゲル先生は逝ってしまった。心細い。

(益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授)

ヴォーゲル先生を偲んで